



prologue

上官殺しのボクト。

その高い戦闘能力を買われ、高い地位を与えられ上層部に困われない彼は、先の隣国との大戦のさなか、会議室で軍議中だった直属の上官達とそこに同席していた権力者たちを全員惨殺したという。

英雄が一転、反逆者の烙印をおされた。本来なら即斬首ものの重罪だが、殺すには惜しい戦力だと、離島の監獄に拘禁された。

当時の記録や、伝え聞く情報から読み取れるのはボクトという人物の断片のみで、脳裏には様々な人物像が浮かんでは消える。

どんな人物なのだろうー。

軍から手配された馬車に揺られながら手元の資料に目を通し、まだ見ぬその人に思いを馳せる。

長引く戦、芳しくない戦況に業を煮やした上層部は、そんな反逆者の力でも借りたいうで、何度か彼の上官候補を監獄に派遣したようだがことごとく彼に嘯み付かれ拒絶され、そこから連れ出すことは叶わなかった。

そんな折、現場の分隊から中央の正規軍に移動してまだ間もなかった俺に下された通達。

「ボクトコウタロウを服従させ戦線に復帰させよ——」

王都の西に位置する小さな港町まで馬車で到着すると、遠く沖に黒い城塞が見えた。準備されていた舟に乗りこむと、黒く小さかった影は次第に大きくなり眼前に迫る。

もともとこの場所は監獄ではなく、要塞として建造された小規模な城だった。それがその責務を果たさなくなると、隔離が必要な重罪人の流刑地に姿を変えたのだ。

島特有の塩気を帯びた空気を肌に感じながら長く薄暗い廊下を抜けると吹き抜けてひらけた空間に彼の独房はあった。

面会のために錠が外された部屋に入ると、さらに中は鉄格子で区切られていて、手前には書記用の簡素な机と椅子が設えられていた。どうやらここは完全な密室ではなく、二重になった鉄格子の窓からは果てなく広がる空と海を臨むことができ、岸壁に打ち寄せる波音とともに光が差し込んでいた。

牢獄というにはいささか華美で、ベッドや机などの家具も揃えられ、奥には身を清める水場もあるようだ。そんな室内の雰囲気には、窓にはめられた鉄格子と入り口を固く閉ざす冷たい鉄の扉の違和感が際立っていた。

特に拘束されている様子もなく、ベッドに腰かけて窓から外を眺めている部屋の主は、他者の侵入に気付いたようでも、こちらを振り向き興味無さそうに事務的に口を開く。

「お前、誰？」

窓からの逆光で表情はよく見えないが、逆立った銀色の髪が光に透けて輪郭をかたどり、両目の金色の光がこちらを射ぬく。

「はじめまして、俺は赤葦といいます。中央から派遣された軍人です。」

聞いてきた当人は得た回答になんの反応も示さない。

隅によせられた椅子を引き寄せて腰掛け、反対にこちらから問いかける。

「あなたの名前。」

「……なまえ？」

「資料で存じ上げてはいるのですが、なんとお呼びすればいいですか？」

こちらの名前を名乗ったときには変化のなかった表情をのぞかせ、器用に片目を細めてこちらを窺う。

「お前おもしろいな。そんなこと聞いてきたヤツは初めてだ。」

木兎でいいよ。」

「では木兎さん、と。」

「別に呼び捨てでもいいのに。」

「いえ、仮にもあなたのほうが以前の階級は上ですし、年齢も年上と認識していますので。」

「お前年下なんだ？なんか落ち着いてるから年上かと思った。」

カリスマ的な英雄、凶暴で冷血非道な反逆者。

実際の彼と話してみるとそのどちらの姿とも重ならない。

人との会話が久しぶりだからなのか、時折言葉に詰まりつつあまり豊富とはいえない語彙でたどたどしくも楽しそうに話す彼は、どこか無邪気な子供にみえる。

「こんなにしゃべったのはスゲー久しぶり！赤葦、また会いに来てくれる？」

「はい、ご迷惑でなければ。」

課せられた任務にすぐ決着をつけようとは元から思っただけでなく、今日はただ単にボクトコウタロウという人物を少しでも知ることが目的だった。監獄の看守達の居住区の一画を借りて数日を過ごし、その間俺は毎日彼の独房に足を運んだ。

木兎さんがしゃべりたいことがあればその話に耳を傾け、外のことを聞かれれば自分の知る限りの話をして聞かせる。

食事の時間には木兎さんが一人の食事は侘しいと言うので、鉄格子で隔たれてはいるが俺も同じ空間で同じ食事をした。

元々、他人との交流や触れ合いに臆する人でもなく、人好きする性格なのだろう。当初のこちらへの関心のなさに感じた壁も、ここに通ううちにすっかりその存在を失っていた。

「赤葦はさ、毎日ここにきてなんて俺の話聞いてくれんの？」

「…俺はあなたに興味があります。」

どう答えたものか、と一瞬考えたが、この人相手に偽りは意味をなさない。いや、自分自身が嘘をつきたくないとなぜかそう思わせるなにかが彼にはあった。

「ここに来る前に、あなたのことを色々調べました。ただそれはあくまで他の誰かが感じたあなたであって、俺がどう感じるのかは直接話をしてみることでしか分からないので、こうして会いに来ています。」

「お前も俺のことここから連れ出して戦わせろって上から言われて来たんだろ？」

「はい、その通りです。」

誤魔化してもしようがないのでその問いに肯定を返す。

「木兎さん、あなたの望みはありますか？一方的な命令や強制はフェアではないので、あなたが望むことで俺に叶えられることがあるのであれば、それを交換条件に俺と契約してください。」

命令ではなく契約。

望む対価が与えられないのであれば、それに応じる必要はない。強制された服従ではいつか破綻する。

「…ここに来るやつらってだいたいみんな、自分に従え、上の命令が聞けないのかっておんなじセリフばっか。つまんねーし聞き飽きた。」

心底うんざりしてるといった表情でそう吐き捨てた木兎さんは、こちらに歩を進め距離をつめると鉄格子越しに俺に手を伸ばしてきた。それを避ける理由もないので、その指が自分の頬に触れるのにも構わず彼の好きなようにさせる。

「お前は俺がどうしたいのか、選択肢を与えて聞いてくれるんだな。」

頬から離れた体温の持ち主が、両目に熱を湛えて歓喜の色を表してみせた。

その瞳に映る自分は、そのときどんな表情をしていただろう。

「いいぜ赤葦、俺はお前の犬になってやるよ。」





か
ば



「キ」

俺の認識では
木兎さんが
帰ってきた側だと
思うんですが：

ただいま

おかえりなさい

任務
お疲れ様でした



しかし
部隊の帰還は
明日になると
報告を受けて
いましたが？



任務も終わったし
さっさと先に
帰ってきた

赤草に早く
ほめて
欲しかったし！



ねえ赤葦



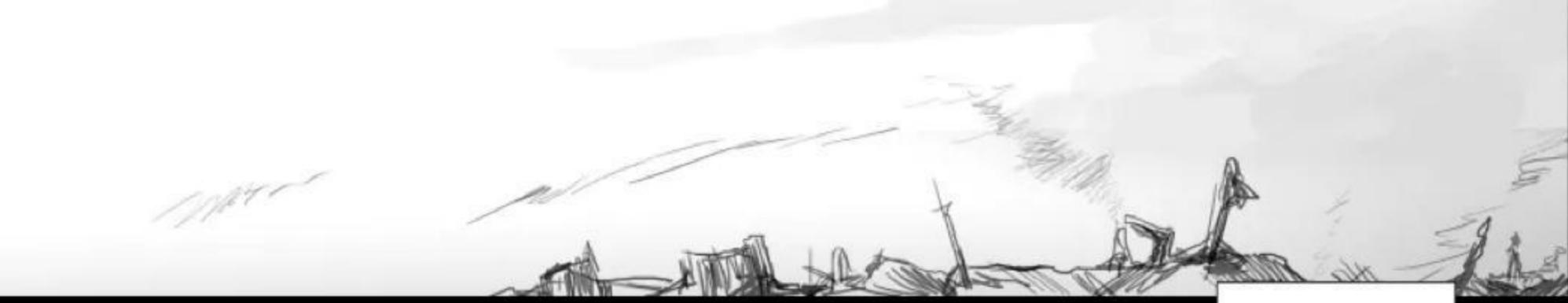
ごほうび
ちょうだい?



バク



…お好きにどうぞ



この人の中に
普段は眠っている
凶暴さが牙を
剥く瞬間に



興奮している
自分を自覚したのは
いつからだろう――









んっ...

はあ

まだ足りない



はあ



俺のこともっと
全部奥まで
受け入れて

血と硝煙の匂い。
清潔な寝具の上で抱かれているときも、この人からはいつも死の匂いがする。

なにか夢を見ていたような気もするが、次第に覚醒していく脳は霧がかかったように明確な記憶をつかむことはできず、早々に思い出すことを放棄した。昨晩までは綺麗に整えられていた寝具は皺が寄り、二人分の熱と水分を吸いとって元の姿を留めていない。激しい律動を受け止めつづけた重い腰をおさえながら気怠い身体を起こすと、背後から太い腕が伸びてきて、身体の外側でも内側でも散々覚えさせられた自分よりも高い体温に捕まり、再度元の場所に引き戻された。



「…なんてすか木兎さん」
「あかあしどこ行くの…？」

寝起きのこの人の声は、普段よりも甘い気がする。
至近距離でこちらの顔をのぞきこんでくる瞳は、窓から差し込んでいる朝日のようでもあり、昨晚の空を彩っていた月のようでもあった。

「どこって仕事です。今日は朝から本部で軍議があるので。あなたが担当した任務の報告ですよ。」

仕事という言葉に興味を削がれたのか、ふーんと言葉を漏らしあくびをひとつ。目尻に浮いた涙を擦り、こちらに視線を戻すとなにかに気付いたよううで、俺の首筋から胸元にかけて指を滑らせ愉快そうに目を細めた。

「身体中にこんな痕つけたまま仕事すんの？」

その指先につられるように視線を下ろすと、噛み跡や鬱血がところどころ花を散らしていた。そんな表面的なものだけではなく、なんなら身体の中にはまだこの人が吐き出した残滓があるような気がして、自然と恨みがましい声になる。

「…誰のせいですか。」

「俺だな！」

なにがそんなに楽しいのか、ニコニコと無邪気に笑う彼に油断していると大きな掌が後頭部にまわされ、気付いたときには唇が重なりそのまま口づけは深いものになっていく。

「……っ」

背筋をつたう快感も溢れる熱も唾液の味も馴染んだもので、やわらかな体の内側で硬く存在を主張する歯列を確かめるように口内を蹂躪する厚い舌を、拒絶することなく受け入れる。溺れまいとすがるように相手の背に回した腕は同意にしかとられない。

「ごちそうさま」

双眸に欲を灯したまま、唇を濡らす唾液を舌で舐めとる姿に、本当に食べられてしまったような気持ちになる。

まだもう少し寝るといふ彼を横目に、脱がされたあと床に放られたまままだ軍の正装である白い隊服に袖を通す。昨晚の恥態も情事の痕跡も、全て覆い隠してくれることを願いながら。

なぜ軍人になったのかと問われれば、気付いたときには目の前にその道が敷かれていたからだ。弱き者を救いたいとか、自国への愛国心とか、ましてや出世を望む野心など、大そうな志があったわけではない。

辺境の農村で生まれ、戦とは無縁の善良な両親の元で育った。ただ生活は豊かなものではなく、災害による飢饉は生活の一部だった。中央の庇護も施しも辺境までは届かない。唯一恵まれていたとすれば、敵国との戦線からは遠く戦乱は対岸の火事で、住民達を脅かすものではなかった。

幼い頃から備わっていた知識欲から、学舎で学ぶ以外にも本や異国の旅人から得る情報をその身に蓄え、自覚ないままに身に付けたそれらは周囲に高く評価された。ある日教会を通じて爵位のある家に養子として迎えた。いとの話があり、両親は息子の将来が明るくひらけるのであればと、我が子との別離を惜しみつつそれに応じた。

引き取られた先で王都の学院に通うこととなり、そのまま士官候補として育てられた。結果として道はひらかれたのではなく、踏み外せないものとして俺の足を絡めとるものだった。

いざ踏み込んだ階級社会、金や権力というものは個人の意志や命よりも大事なものだろうか。終わらない戦に搾取される国民と私腹を肥やす一部の上流階級。学べば学ぶほど、知れば知るほどこの世界はひどく歪で精巧で、複雑なようにみえて至極単純な構造で成り立っている。

王都の一面に位置する軍本部、長く拘束された軍議から解放され、暖められていた棟内から一步出ると、入り込んだ外気が肌寒く外套を羽織る。冷たさとともにどこか重苦しい空気が漂う外廊下を歩いていると、懐かしい声に呼び止められた。



「よう、久しぶり。」

この場に不釣り合いな飄々とした雰囲気を感じながら、その身には血のように赤い隊服。暗殺を生業にする部隊の象徴。

「…黒尾さん、はるばる王都までなにか御用ですか？」

「んー観光がてら中央の状況視察に。」

士官候補生時代に知り合い、階級社会に不馴れだった俺のことをなぜか目につけよく面倒をみてくれていた人。軍に配属されて以降は所属が違ってたため顔を合わせることは稀だった。なんだかんだと思は感じているが、こちらが核心を突こうにも、掴みどころがなくさらりとかわすこの人が、今も昔も少し苦手だ。

「お暇なんですか？でしたら選り取りみどり、黒尾さんにおあつらえ向きの任務が山ほどありますが。」

「相変わらずお堅いなくちゃんと仕事はしてるよ。それにしても出世したな、「赤葦中佐」」

「…お陰様で。」

上層部に近づくほど知り得る情報も待遇も、良くも悪くも目に見えて変わった。

「お前んとこのミミズク、敵前線の補給基地の一個中隊、ほとんど一人で潰したんだって？よくあんなやつ飼いやつて慣らしてるな。どんなエサやってんの。」

少しの畏怖を冗談に織り交ぜてそうからかう。どうやら周りには俺が彼の手綱を握っているように映るようだ。

「…あの人を、飼い慣らせたことなんて一度もないですよ。」

凶暴で美しい人。

気を抜くと隊服の内側に隠した熱が露呈しそうで、乱れてもいない襟元に思わず手をやった。

白い軍服は、奪った命の赤がよく映える。
そう評したのは誰だったか。

「…しよぼくれないてください。あなたが隊の正装を嫌いなのは知ってますが、今日は我慢して着てもらいます。」
「赤葦が着てるのは似合ってるし脱がすの興奮するからいいけど、俺はこんな堅苦しいの着たくない！」

なんだか聞き捨てならない台詞が聞こえた気もするが、それは敢えて聞き流す。それに、俺に似合ってるこの人は言うが、こちらに言わせれば、白く輝くこの隊服は彼のために作られたんじゃないかと思うくらい木兎さんに似合っていた。厚い身体を包むその白は神々しく、威光すら感じさせる。

今夜は王宮での晩餐会。国内の王公貴族が集う中、戦果を上げた者へ褒賞が与えられる。本来であれば木兎さんは罪人として表舞台に出ることは叶わないのだが、過去の事件のことは当時軍内部のみで処理され、世には漏れることなく人知れず揉み消されたものだった。確かに、一兵卒による暴走を止められなかった事態など醜聞も甚だしい、消し去りた汚点なのだろう。

まだ不服そうに支度を放棄している木兎さんの気分をなんとか持ち上げようと、極力柔らかい口調で言い聞かせる。

「すぐ…は終わらないと思いますが、離れず俺の側にいてくれればいいので。」

崩されたままの襟元を留めようと手を伸ばしたところで、首元の見慣れた赤に気付く。

「木兎さん、首輪は外してください。」

「なんで？」

「なんてって…晴れの場には似つかわしくないのでしょう。」

牢獄から連れ出したあと、契約の証として俺の手から与えたドッグタグの付いたこの首輪を、この人はなぜかいたく気に入っていて、戦場のみならず普段も常に身に付けている。

杓子定規な答えに満足しなかった木兎さんは、手袋を嵌めた俺の手を取ると、口元に寄せ恭しく口付けた。

「赤葦、俺は誰のもの？」

まるで所有されることを喜んでいるかのように、試すようなセリフを樂しげに口にする。

(俺は誰のもの、か…)

捕らわれているのはどちらのほうか——

こちらを伺う金色の瞳を見つめ返し、今度は彼が満足するであろう答えを口にしてみせた。



「captured」

木兔さんが上官の軍パロも大好きなんですが、
赤葦くんが上官でそれに従う木兔さんという構図に興奮して
当時ツイッターで文字で妄想吐き出していた軍パロ妄想。
小説…ムズカシイ…！！

木兔さんに、お前の犬になってやるって言って欲しかったのと、
上官なのに部下の木兔さんに抱かれちゃう赤葦くんが
描きたくて形になったものでした。

